



歴史と博物館を語る

あらまた

荒俣宏

ひろし

坂本区長

荒俣宏、板橋を語る!

板橋区では、今後の10年を見据えた観光方針「板橋区観光振興ビジョン」の策定に向け、検討をしています。そこで今回は、幼少期、大山で暮らした博物学者荒俣宏氏が板橋の歴史と当時の風景を語ります。荒俣氏の目を通して発見された、板橋の魅力とは？

表向きの歴史より裏の庶民の暮らしに大変関心があるんです。

——本日は板橋区立郷土資料館の展示品を見ながら、板橋区の歴史と、荒俣さんの板橋の思い出をお聞きしたいと思います。荒俣さんは昭和23年生まれで、大山金井町の板橋第七小学校に通ってらしたんですよね。

荒俣 ええ。近所には活版印刷工場がたくさんあって、あんまり面白いで学校の行き帰りによく工場を眺めていましたね。うちの家は、非鉄金属の卸売りなんですが、同級生も工場の下請けの家の子どもが多くて、みんな中学を卒業すると工場の働き手になっていました。この郷土資料館にある旧田中家のような民家はなかったけれど……。そういえば遠足で牛の乳しぼりを体験しました。下町だったけれど、田舎に近かったんだよね。

区長 板橋区って都会だけれども、田舎のセンスも持ち合わせていると思っています。名古屋がやや近いんですよ。田舎的なセンスがある東京人って少ないから、貴重な存在だと思いますね。

区長 宿場の時代から、板橋は江戸と地方のちょうど境界にあった街なので、その感覚は間違いなんでしょうね(笑)。

荒俣 ちょうど今日の前に、板橋区史が編まれますね。板橋区史は、なんと、櫻井徳太郎さんが編まれていますね。

区長 櫻井先生は、板橋区に住んでいらしたんです。

荒俣 それでこんな立派なシリーズになっているんですね。櫻井徳太郎さんは当時の人気民俗

学・歴史学者ですよ。ちょっと今読んでみます。へえ、板橋の宿に、ラクダが見世物として来たらしいですよ。ほかにもこんなに民話がある。こりや面白い。

区長 なにかいい使い道はありますか。

荒俣 昔話は非常に面白いですよ。板橋の伝説や民話を、小学生が語れるようになるといいですね。熊野古道が世界遺産になって10年目にそういう取り組みをしていました。観光客に「これは何ですか」って聞かれたときに、小学生でも答えられるようにしようという、知事のアイデアで始めたそうです。子どもたちも地元をよく理解できますしね。

区長 それはいいですね。実は、櫻井先生の研究資料を板橋区立公文書館で保存しています。

荒俣 じゃあ原資料も残っている。そりやすごい。それを掘り起こして、街の物語みたいなものがつくれると面白い。板橋って庚申塔もいっぱいあるし、民俗学をやるなら宝庫だと思えますよ。

区長 そうかもしれません。櫻井先生の影響もあって、徳丸北野神社と赤塚諏訪神社で行われる神事「田遊び」も比較的早く文化財になりました。

荒俣 この本、全部読みたいな。ここに遊郭の話が載っています。今、街にはそんな痕跡は全くありませんが、板橋には遊女が20人以上いたらしい。最近の人たちは、表向きの歴史より裏の庶民の暮らしや、今まで表に出なかった話に大変関心があるんです。そこを掘り下げていくと面白いと思いますよ。

板橋区って、厚生施設の集積地なんです。

荒俣 何といっても、板橋区が目ざされたのは近代になって都心にあった厚生施設が移転してきたこと。第一弾は、明治7年の養育院の移転。渋沢栄一が運営していました。子どもの頃、渋沢栄一の巨大な銅像を見てこのおじさん、誰？って思っていました(笑)、すごい人なんです。養育院事業を死ぬまでやっていたからね。私がほかの区より板橋区に住んでいたかと思っただけは、養育院現在の東京都健康長寿医療センターがあること。板橋区って、厚生施設の集積地なんです。豊島病院もありますからね。実は私、豊島病院で命を救われたことがあります。4歳ごろ疫痢にかかったのですが、当時貴重だった抗生物質を処方してもらって助かった。後から知ったのですが、豊島病院は養育院と非常に関係があって、子どもたちや老人の救済事業も手がける専門病院だったんです。

——じゃあ、板橋区には最先端医療がそろっていた。

荒俣 そう。もう少し経つと近所に日大(板橋)病院もできて。

区長 最後に帝京(大学病院)もできました。実は板橋は東京の中では一番病床数が多いんですよ。

庶民的だけれども最先端。

荒俣 例えば王子は板橋と同じく豊島地区に含まれますが、徳川家の遊び場だったという、ひとつの地域的な集積がある。でも板橋って、そこから外れたところを将軍がみんな板橋にしちやえって、そんなふうに来たのではと思っています。だから、農業地帯と工

業地帯が入り組んでいる。練馬あたりの人たちに言わせると、板橋区役所あたりは工場街があるからやりにくいし、板橋の人からすると、農業が盛んな今の練馬地域は、よくわからん地域であると。はつきりとひと括りにはできない。

区長 練馬区はもともと板橋区で、戦後分割しましたしね。

荒俣 無理もないよね、工場と農地じゃ地域性が全然違うもの。けれど区内を石神井川が流れている。石神井川流域に沿って考えると、板橋区って違って見えるのではないだろうか。

区長 そうかもしれません。板橋区って不思議と、都心に向かっていくような方向性が強いんです。道も川も都心に向かって流れていますし、昔は都心のほうに嫁いで行く人が多かったんですよ(笑)。

荒俣 そういえばうちのおじさんたちも、田舎のほうからお嫁さんをもたらしていたなあ。一方で、都心からやって来る人たちもいる。うちのじいさんたちは、浅草の住民でしたが板橋へやって来た。そんな人たちがいっぱいいたから、町内会が盛んで、自治的な組織があったんですね。名主さまがいるような農民文化じゃなくて町民文化。例えば、板橋ってズーゾー弁のような印象があるけれど、実は下町言葉を使っている、近所の人たちは子どもを「ナントカ坊」と呼んでいました。ヒロシだったらヒロ坊と言うように。

区長 それは神田や浅草の文化ですね。町民文化が飛び火している。

——板橋はそういう町民文化もありつつ農村もあって。それがはっきり分かれている訳ではなく、グラデーションになっているんですね。

荒俣 だから大きな施設はできない。あっても庶民のための病院と軍需工場くらい。そしてにぎわっていたのは下請け工場ですよ。それってたくさんの方が出入りしていた宿場町だった影響もあるかもしれない。そういう街だから、企業との親密度が高くて、「エスビー通り」とかすぐ名前がついちやう(笑)。

——これ、当時板橋区にあったエスビー食品の社屋の写真なんです。

荒俣 面白い。国会議事堂にかなり近いですね(笑)。エスビー通りってよく行ったけれど、建物は初めて見たなあ。

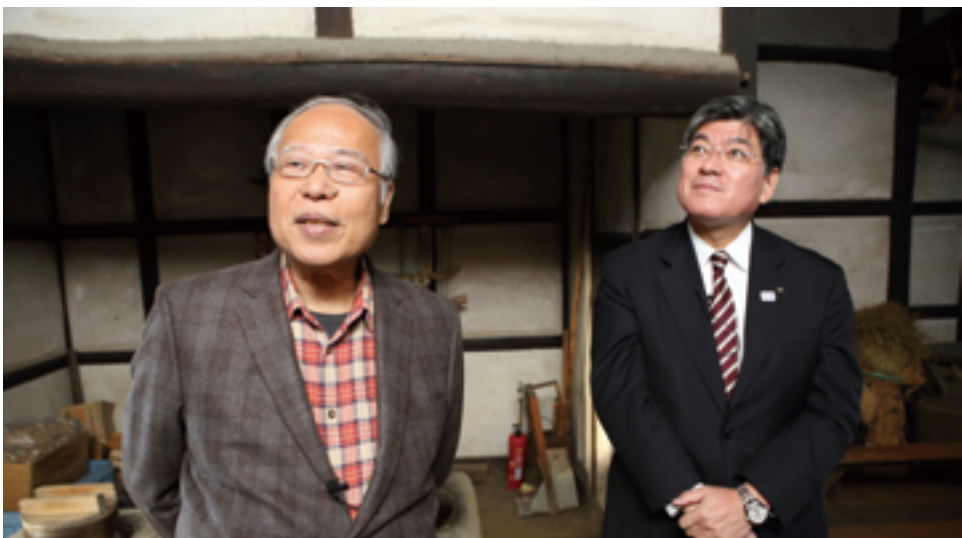
——よく見ると今もこの社屋、おなじみの「赤缶カレー粉」に印刷されています。

荒俣 缶に描かれているのは国会議事堂じゃなくて社屋のほうだったのか(笑)！でも、すごいね。当時はあやかることができた時代でした。

区長 気概を感じますよね(笑)。ほかにもたくさん企業が残っているんです。タニタとかトプロンとか。



◀エスビー食品旧社屋



衆とのつながりも強いという、不思議な地域ですよ。軍需工場だと、高い塀をつくってなるべく中をのぞかせないようにするんですよけど、板橋の工場って中へ入ろうと思えば気軽に見られました。

——庶民的だけれども最先端。

荒俣 そう、そこがすごい。うまくやれば、もっとすごい区になっていたかも。でも誇らしくなっちゃうな。また将来板橋区に戻って来ようかな(笑)。面白い話が結構たくさん眠っていますね。こういった話をまとめて、展示会をすると面白いんじゃないですか。

区長 ぜひやりたいですね。今日のお話だけでも、かなりわくわくしています。嬉しい限りです。今日は本当にありがとうございました。

荒俣 うちの近くにも酢昆布なんかをつくっている、大きな工場がありました。なんて名前だったかな……。

区長 味の菊一。菊池食品じゃないですか。

荒俣 そうです、菊池食品！そばを通ると、すっぱいにおいがして、おなかをぎゅーっと鳴ったのを、今でも覚えています。

区長 ここでつくった「のしするめ」は日本橋の三越で売っていたそうですね。

荒俣 三越に卸していたなんて、ブランドじゃないですか。すごいなあ。ほかにも近所に活版屋が多かったのは、凸版印刷があったからでしょうね。基幹産業がありながら、民

荒俣 宏(あらまた・ひろし)

1947年東京都生まれ。博物学者、小説家、評論家。慶応大学法学部卒業後、日魯漁業(現在のマルハニチロ)に入社。その間、紀田順一郎氏らと、雑誌『幻想と怪奇』を発行。英米の幻想文学などを翻訳しつつ、評論も展開。独立後は翻訳、小説、博物学、神秘学などジャンルを越えた執筆活動が続ける。代表作に『帝都物語』、『世界大博物図鑑』などがある。幼少期には板橋第七小学校に通っており、2012年には板橋区にて「わが街板橋の今昔話」と題した講演を行った。

information

板橋区では、区の魅力や観光の取り組みについて一緒に考え、活動していただけの方を募集しています。板橋区の魅力を考え、見つけ、磨き、そして広く伝えていく。区在住の方も、そうでない方も、ぜひ一緒に取り組みませんか？

問い合わせ先:

板橋区くらしと観光課 kb-kankou@city.itabashi.tokyo.jp